

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 6月 7日現在

機関番号：32630

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2010～2012

課題番号：22320044

研究課題名（和文） ポピュラー音楽にみるローカルアイデンティティの日米比較研究

研究課題名（英文） Comparative Study on Local Identity through Popular Music in Japan and the United States

研究代表者

東谷 護（TOYA MAMORU）

成城大学・文芸学部・准教授

研究者番号：10453656

研究成果の概要（和文）：グローバル化の下における多様なポピュラー音楽のローカルアイデンティティには、日米ともに、地域密着型の「情熱家」の存在が重要な役割を果たしていることが明らかとなった。情熱家とは、何らかのポピュラー音楽を地域等に導入し、根づかせ、地域独自のものへと変質させる為に、積極的な活動を行い、そうした活動が地域内の他者にも認知され、承認された人である。また、グローバル化を支えたシステム、すなわちメディアの存在が、局地的な地域の文脈でも重要なことが明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：Through our research, it has become clear that the role of “enthusiasts” is substantially important for the local identities of various forms of popular music under the process of globalization. Enthusiasts are those people who are acknowledged and accepted by other members of the local community as being active in introducing, establishing, and localizing a certain kind of music into their community. In addition, the role of the media, which has been a major infrastructure for globalization, is also shown to be indispensable in the local context.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	3,300,000	990,000	4,290,000
2011年度	2,700,000	810,000	3,510,000
2012年度	2,300,000	690,000	2,990,000
総計	8,300,000	2,490,000	10,790,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：芸術学、芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：グローバル化、ローカリティ、ポピュラー音楽研究、オーセンティシティ、情熱家、ゲートキーパー、表象、フィールドワーク

## 1. 研究開始当初の背景

(1) ポピュラー文化、とりわけポピュラー音楽という、英語圏のポピュラー音楽がグローバルスタンダードとして一般には認識されていると言っても過言ではないだろう。たしかに、マスメディアによって流行する音楽、あるいはヒットという名の下に世界各国、各地域に大量に流通する音楽という側面から

とらえれば、ポピュラー音楽とはアメリカ発の世界的ヒットとなる音楽を指し示す。しかし、米国発のポピュラー音楽の受容のされ方は国や地域によって異なり、さらには各国、各地域独自のポピュラー音楽が存在している事実を我々は知っている。世界的ヒットと結びつくポピュラー音楽がグローバルスタンダードならば、各国、各地域独自のポピュ

ラー音楽は「ローカルアイデンティティ」を有する。

(2) 以上のような現状認識に基づき、研究代表者（東谷護）ならびに研究分担者（大山昌彦・木本玲一・安田昌弘・山田晴通）らは、1990年代半ばより日本ポピュラー音楽学会に会員として参画し、議論を常に共有してきた。

こうした議論の成果として、東谷護・編著『ポピュラー音楽へのまなざしー売る・読む・楽しむ』（勁草書房、2003年）、三井徹監修（大山昌彦編著）『ポピュラー音楽とアカデミズム』（音楽之友社、2005年）、東谷護・編著『拡散する音楽文化をどうとらえるか』（勁草書房、2008年）といった、日本でのポピュラー音楽研究の論考集の編纂、並びに書籍、論文を世に問うてきた。各自の研究としても、東谷護、安田昌弘、木本玲一は博士論文として成果をあげ、これらは、東谷護『進駐軍クラブから歌謡曲へー戦後日本ポピュラー音楽の黎明期』（みすず書房、2005年）、木本玲一『グローバリゼーションと音楽文化ー日本のラップ・ミュージック』（勁草書房、2009年）として刊行してきた。また、安田昌弘は英国留学の成果として博士号取得以外に、安田昌弘・訳『ポピュラー音楽理論入門』（Negus, Keith 著、水声社、2004年）、安田昌弘・訳『ポピュラー音楽をつくる・ミュージシャン、創造性、制度』（Toynbee, Jason みすず書房、2004年）を刊行し、ポピュラー音楽研究の海外の最新理論や研究動向を翻訳という形で日本に紹介してきた。

(3) 上記の通り、研究代表者、並びに研究分担者は、日本でのポピュラー音楽研究において、相応の研究成果を発信してきたと言える。しかしながら同時に限界も明らかとなった。議論の共有はできていても、課題解決を個人レベルに任せ、共同研究でこそ研究成果が期待できる「大きな問題系」の解決にはポピュラー音楽に関わる研究においては、日本では残念ながらまだ何もなされていない。

## 2. 研究の目的

(1) 本研究は、アメリカ発のポピュラー音楽が「グローバルスタンダード」として日本国内で受容・消費された結果、日本独自の「ローカルアイデンティティ」を有した地域とオリジナルと称される米国の特定地域との比較研究を通して、ポピュラー音楽文化を中心としたグローバルとローカルの相克、ポピュラー音楽、ひいてはポピュラー文化と地域性

との相関関係を明らかにすることを目的とするものである。なお、本研究は、インタビュー調査を含めた実証研究であると同時に、ポピュラー文化におけるグローバルとローカルをめぐる理論構築を目指す基礎研究でもある。

(2) ポピュラー音楽文化が、ローカルアイデンティティを有するとは、「ある特定地域には、特定の音楽と結びつく」ということである。具体的には、「パリとアコーディオン」、「リバプールとマーギービート」、「福岡とライブハウス」というように特定地域と特定の音楽ジャンル、あるいは音楽に関わることが結びつけられて語られることである。だが、これらの結びつきは、概して、音楽雑誌やテレビ番組で、トピック的にとりあげられたものであり、確たる実証性は乏しいものも含まれる。また、話題だけが一人歩きしてしまい、どのように独自の音楽文化が生み出され、人々に享受されているかが明確でない。

(3) 国外の先行する研究に目を向ければ、イギリスのミルトンキーンズの音楽文化を民族誌として著した、Finnegan, Ruth. *The Hidden Musicians: Music-Making in an English Town*, (1989)、や同じく英国のリバプールの民族誌を著した、Cohen, Sara. *Rock Culture in Liverpool: Popular Music in the Making*, (1991)が、国内では茨城県のある地域を調査対象地として論考を著した、大山昌彦「ダンシング・イン・ザ・ストリートー茨城県A市におけるロックンロールと若者サブカルチャー」『社会人類学年報』（1998年）があげられる。

(4) このように、学術的先行研究として実証的研究は数少ない。本プロジェクトは、ポピュラー音楽を研究対象とした先行研究の弱さの一つである、実証性の乏しさ、歴史的視点の欠如、印象批評まがいの論考と一線を画すために、インタビュー調査を含む実証研究を核とする。

(5) だが、本研究の学術的な特色や独創的な点は、実証性だけにあるのではない。また、ポピュラー音楽にまつわる言説やイメージと実証研究によって導かれたズレや差違／差異がみとめられるだけなのでもない。ローカルアイデンティティの存在がグローバル化していくときに、どのようなものが強調され、どのようなものが削ぎ落とされていくのか、ということが明らかになることによって、

ポピュラー音楽、ひいてはポピュラー文化と地域性との相関関係、現代文化を考究するうえで、大きな社会・文化的潮流の変革やパラダイム・シフトをも示唆するものであり、その意味で、学界のみならず広く社会一般への貢献を目指すものである。

### 3. 研究の方法

(1) 本研究は、米国発のポピュラー音楽が「グローバルスタンダード」として日本国内で受容・消費され、独自の「ローカルアイデンティティ」を有した地域とオリジナルと称される米国の特定地域との比較研究を通して、ポピュラー音楽と地域性との相関関係を明らかにすることを目的とするものである。この目的を達成すべく、研究代表者、並びに研究分担者は、各自がこれまでに研究を進めてきたポピュラー音楽のジャンルと関係性の深い地域でのインタビューを含む現地調査を行うこととした。すなわち、ポピュラー音楽のジャンルで分類すると、東谷はフォークソング、大山はロックンロール、木本はヒップホップ、安田はブルース、そして山田はジャズを担当することとした。

(2) 上記の個別研究調査と並んで、現地での共同調査、共同討議を継続的に行い、これらを効果的に行う一助として、本研究課題に対する個別研究調査の中間報告と全体討議を研究会形式(非公開)で行った。ここでは、各自の問題点と今後の課題、並びに共同研究の目指すポピュラー音楽にみるローカルアイデンティティの理論構築についての問題点と今後の課題を議論し、日本ポピュラー音楽学会の年次大会において、ワークショップを企画し、研究代表者、並びに研究分担者全員が参加し、問題提起者、指名討論者、司会を分担した。このような研究の中間発表と議論を広く公開することによって、多くの質問やコメントをいただき、自分たちの研究にフィードバックさせた。

(3) 研究対象のジャンルとそれぞれの主たる研究調査対象地は以下の通りである。

ジャンル	日本	米国
フォークソング	中津川	Beacon, NY
ロックンロール	水戸	Memphis
ヒップホップ	渋谷	New York City
ブルース	京都	Chicago
ジャズ	横浜	New Orleans

### 4. 研究成果

(1) 当初、設定した「あるポピュラー音楽

には、特定の地域性が表象される」という仮説に無理があることが確認された。先述したように、特定ジャンルと「場所」が結びつけて語られる際には、確たる実証性が乏しいものがあることを本研究の計画段階で認識していたが、実証そのものが難しいことが明らかになった。

(2) この研究成果は、ポピュラー音楽のジャンルと土地の結びつきを分析する限界がみえたことに他ならない。しかしながら、ある地域やある場所特有の音楽文化は存在する事実を我々は知っている。しかも、ローカルアイデンティティを強く持つポピュラー音楽文化が存在するのである。

(3) 本プロジェクトの用いたインタビューを含む実証研究によって、ポピュラー音楽のグローバル化の下でのローカルアイデンティティには、日米ともに「情熱家」の存在が重要な役割を果たしていることが明らかとなった。情熱家とは、何らかのポピュラー音楽を地域等に根づかせるために、積極的な活動を行い、そうした活動が地域で認められ他者にも共有されるに至った人のことである。「情熱家」には地域での文化実践との接合を指向する地域アイデンティティ主導型の情熱家と、あくまでも音楽そのものを中心に据える音楽アイデンティティ主導型の情熱家に大別できることが明らかとなった。また、ポピュラー音楽のグローバル化を支えたシステム、すなわちメディアの存在も大きいことが明らかとなった。

(4) 今後は、本研究の成果をふまえ、経験的、実証的研究を中心に、多角的な分析軸の導入とインターネットを代表するマルチメディアの登場によって、中央から地域へという一方向的なグローバル化ではなく、逆方向も可能にした、双方向的なグローバル化を視野にいたしたポピュラー音楽にみるローカルアイデンティティの総合的な研究を進めたい。

(5) 以下に、各年度の研究調査対象地を記しておきたい。

#### ○フィールド対象地

2010年度

日本：水戸（茨城県）、東京（東京都）、京都（京都府）、中津川（岐阜県）

U S : Minneapolis, MN. St. Paul, MN. Hibbing, MN. Chicago, IL.

Memphis, TN. Montgomery, AL.  
New Orleans, LA. Tupelo, MS.  
Nashville, TN. Murfreesboro,  
TN. Washington, D.C.  
New York City, NY.

2011 年度

日本：水戸（茨城県）、京都（京都府）、  
中津川（岐阜県）、福生（東京都）  
U S：Boston, MA. Chicago, IL.  
Washington, D.C.  
New York City, NY.

2012 年度

日本：水戸（茨城県）、京都（京都府）、  
中津川（岐阜県）、郡山（福島県）  
福岡（福岡県）  
U S：New Orleans, LA. Memphis, TN.  
Chicago, IL. Boston, MA.  
Beacon, NY. Newburgh, NY.  
New York City, NY.

○米国訪問大学（研究者との情報交換等、米  
国訪問図書館との重複は除く）

MIT(Massachusetts Institute of  
Technology), MA.

○米国訪問図書館（研究者、図書館司書との  
情報交換等、研究課題に有益なものに限る）

1. Bob Dylan Collection, Hibbing Public  
Library, MN.
2. Chicago Jazz Archive, University of  
Chicago Library, IL.
3. Center for Black Music Research,  
Columbia College Chicago, IL.
4. The Center for Popular Music, Middle  
Tennessee State University, TN.

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者に  
は下線）

〔雑誌論文〕（計 12 件）

① Mamoru Toya, “The Culture of Popular  
Music in Occupied Japan” in Toru Mitsui  
(ed.) *Made in Japan : Studies in Popular  
Music* (Routledge Global Popular Music  
Series). Routledge, 2013. (in press)

② 山田晴通 「地名の使用にみる音楽のローカ  
ルアイデンティティの諸相ポピュラー音楽  
における事例を中心に」, 『成城大学共通教  
育論叢』5, pp. 93-106, 2013 年.

③ Masahiro Yasuda, “Japan” in L. Marshal  
(ed.) *International Recording Industries*.  
pp.152-170, Routledge, 2012.

④ 安田昌弘 「京都とブルースはどう結びつい

ているかー文化のグローバル化とせめぎあ  
う空間性」, 『京都精華大学紀要』41, pp. 4-26,  
〔査読有〕, 2012 年.

⑤ 大山昌彦 「若者サブカルチャーの脱世代化  
と地域化」, 小谷敏・他編『若者の現在ー文化』,  
pp. 177-209, 日本図書センター, 2012 年.

⑥ 木本玲一 「00 年代以降の音楽産業」, 『人  
間社会研究』9 号, pp. 27-40, 〔査読無〕, 2012  
年.

⑦ 東谷護 「ポピュラー音楽にみるグローバ  
ル化とローカル化の差異／差違」, 上杉富之・  
及川祥平（編）『共振する世界の対象化に向  
けてーグローバル研究の理論と実践ー』（CGS  
シンポジウム報告書）, pp. 103-121, 成城大学  
民俗学研究所グローバル研究センター, 2011  
年.

⑧ 大山昌彦 「歩行者天国のゆくえーグローバ  
リゼーション下における都市再開発にとも  
なう社交空間の変容」, 遠藤薫編著『グロー  
バリゼーションと都市変容』, pp. 187-208, 世  
界思想社, 2011 年.

⑨ 木本玲一 「米軍基地を介した地域社会のグ  
ローバル化／ローカル化ー福生（ふっさ）を  
事例に」, 遠藤薫編著『グローバリゼーシ  
ョンと都市変容』, pp. 141-161, 世界思想  
社, 2011 年.

⑩ 山田晴通 「米国のポピュラー音楽系博物館  
等展示施設にみるローカルアイデンティ  
ティの表出とその正統性」, 『人文自然科学論  
集』, 130, pp. 155-187, 〔査読有〕, 2011 年.

⑪ 木本玲一 「ヒップホップ文化におけるロー  
カリティの所在」, 『人間社会研究』8  
号, pp. 103-116, 〔査読無〕, 2011 年.

⑫ 山田晴通 「新聞記事データベースにみる音  
楽ジャンル名としての「フォーク」概念の定  
着過程」, 『コミュニケーション科学』, 32,  
pp. 157-190, 〔査読有〕, 2010 年.

〔学会発表〕（計 10 件）

① 東谷護、大山昌彦、木本玲一、安田昌弘、  
山田晴通、遠藤薫 「音楽文化におけるローカ  
リゼーションの諸相」（ワークショップ）, 日  
本ポピュラー音楽学会, (2012 年 12 月 9 日,  
武蔵大学).

② 東谷護、大山昌彦、木本玲一、安田昌弘、  
山田晴通 「ポピュラー音楽のローカルアイ  
デンティティ」（ワークショップ）, 日本ポピ  
ュラー音楽学会, (2011 年 12 月 11 日, 大阪市立  
大学).

〔図書〕（計 3 件）

① 東谷護（編）『ローカルアイデンティティ  
から読み解くポピュラー音楽文化』せりか書  
房, 2013 年. 〔印刷中〕

② 東谷護（編）『日本のポピュラー音楽をど  
うとらえるか』（CGS シンポジウム報告書）,  
成城大学研究機構グローバル研究センタ

一, 2012 年.

③東谷護（編）『地域共同体の文化実践とポピュラー文化との関係性－岐阜県東濃地区の文化実践を事例に－』（CGS ワーキング・ペーパー6）, pp. 1-50, 成城大学民俗学研究所グローバル研究センター, 2011 年.

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

東谷 護 (TOYA MAMORU)  
成城大学・文芸学部・准教授  
研究者番号：1 0 4 5 3 6 5 6

### (2) 研究分担者

大山 昌彦 (OOYAMA MASAHIKO)  
東京工科大学・教養学環・准教授  
研究者番号：4 0 3 2 9 1 7 3

木本 玲一 (KIMOTO REIICHI)  
相模女子大学・人間社会学部・准教授  
研究者番号：7 0 5 1 2 0 7 8

安田 昌弘 (YASUDA MASAHIRO)  
京都精華大学・人文学部・准教授  
研究者番号：1 0 5 5 4 1 2 3

山田 晴通 (YAMADA HARUMICHI)  
東京経済大学・コミュニケーション学部・教授  
研究者番号：4 0 1 9 1 3 2 4